

Linux クラスターによる教育・研究両用システムの構築

宮 澤 三 造[†]

工学部学生の情報処理演習用に使用する 120 台の Linux PC を、演習用のデスクトップとしてのみならずクラスター構成により研究用に使用するシステムを構築運用している。クラスターとして使用するためには、24 時間稼働は前提である。リブートできないようなハード、ソフト両面での設定も必要である。システムの概要をご報告する。

キーワード: linux クラスター, PC クラスター, 演習用デスクトップ, クラスター計算

A Linux PC Cluster for Use as Both Desktops and Computing Servers

SANZO MIYAZAWA[†]

A linux cluster consisting of 120 desktop computers has been designed and is used for both educational use as desktops for students and research use for cluster computing. To accomplish its non-stop operation required for the cluster computing, the desktops must be configured in both hardware and software to be prevented from their halts. Here, we report the outline of how the hardwares of PC were designed, what softwares were chosen to be installed, how the systems were installed and are managed.

Keywords: linux cluster, PC cluster, desktop, cluster computing

1. はじめに

従来、学生教育用に使用する端末は、主に管理運用の観点からシステムを構築するのが通常である。例えば、UNIX システムの場合には、ワークステーション (WS) のコスト、管理運用のコストの軽減のため、X- 端末を用いるのが常であった。しかし、近年 WS も急激に安価になり、また PC UNIX を利用する場合には価格的にはむしろ X- 端末より安価になった。Thin client とのハードの違いは、ディスクがあるかないかである。ホワイトボックスの場合には、性能及び信頼性の観点からパーツを選び組合せることができる利点だけでなく、価格もメーカー品をはるかに下回る。ディスクの追加があっても Thin client より安価である。このような状況では、X- 端末は WS 管理運用のコスト軽減以外に選択する理由を見出せない。Windows を使用する環境においても管理コストを考えてか、Windows 端末も販売されている。しかし、管理コストはシステムの運用次第で Thin client 同様のコストに押えられる。大学の計算 / 教育センターにおいては、何よりも管理運用に携われる

人的資源に乏しいから、管理運用のコストは機器選定の最も重要なファクターである。私としても、教育用としてしか使用できないのであれば、他を少々犠牲にしても、管理運用の最も容易なシステムを構築したいと思う。一方、当センターにおいては、乏しい予算を遣り繰りして、研究用のシステムもサポートしなければならない。予算の面から考えると、教育用デスクトップの使用率は低く、はなはだもったいない。演習に使用する時間帯は 80-100% の使用率、自習用に開放している時間帯 (8 時 30 分から 22 時) で 20% 程度であろう。1 年を通して考えれば 10-20% 程度の使用率にしかならない。つまり、少なくとも 80% は無駄に PC を遊ばせていることになる。その意味では、教育用 PC の利用は改善の余地がある。これは教育用 PC だけではなく single user 用の PC のほとんど全てについて言えることであるが、1-2 年で使用するに耐えなくなる計算機を使用せずほって置くのは無駄である。限りなく研究予算を削られつつある大学の研究者としては、教育用 PC を学生の使用していない時間、遊ばせておく手はないであろう。もちろん Windows を使用する場合は打つ手がないのであるが、幸いにして私の関与する桐生地区における教育システムは、工学部の 2 年次以上の学生を対象としている関係で UNIX 系 OS のみで問題ない。(ちなみに、群

[†] 群馬大学工学部

Gunma University, Faculty of Technology

E-mail: miyazawa@smlab.sci.gunma-u.ac.jp

馬大学は3キャンパスからなるが、他キャンパスではWindowsのみか、Windows / linux の dual system を採用している。) 桐生地区における教育システムは計120台のデスクトップが必要である。そこですべてUNIX系OSで稼働させ、クラスター構成で研究用にも使用できるようなシステムを構成した。教育研究両用システムとして運用するためには考慮しなければならない問題点がいくつかある。システムの概略をご報告する。

2. ハードウェア構成

まずは、本報告に直接関係していると思われる範囲で、システム構成を簡単に述べておこう。PCのハードウェア構成は、予算の制約もあり教育用のデスクトップとしての要請のみを考慮して仕様を決めた。それ故、研究用のクラスターとしてはCPUが非力ではある。しかし、導入後1-2年は台数(120台)による効果で十分使いものになろう。表1には、参考のためサーバー及び研究用のDual Alpha 21264A 750MHzの18台からなるクラスターについても概略を記した。いずれもホワイトボックスである。

ハードウェアに関して最も重要なことは、24時間稼働を前提にして信頼できるパーツが得られるように仕様書を記述するということである。私供も随分注意して記述した。例えば、ネットワークカードはchipは同じでも性能にバラツキがあるので、chipメーカーの純正品であること等々を要求した。しかし、残念ながら(予算に比し)満足のいくパーツが得られたとは言えない。例えば、main boardはマニヤ向け製品で正しい選択であったのか? 納入メーカーの事情でこちらの望む製品ではなかった。そのためでもないだろうが、CPU電圧が不適当でリブート時にブートしないPCが続出し、原因調査に無駄な時間を使わねばならなかった。Windowsとしての使用では、1度目でブートしなくともおかしいなということですが、ブートフェールがおきるようではリモート管理は不可能になる。これは一般的に言えることだが、PCのハードウェアは初期不良が高頻度なので、十分なチェックを要求することである。チェック項目として必須なのは、1) メモリーのread/write 2) (特にIDE Diskの場合は) ディスクのread/writeテストである。納入後も、3-4週間で理由もなく停止してしまうようなPCの場合は、第一にメモリー、次にメインボードの不良である。台数が多いので原因を突き止める人的余力はない。このような場合は全交換で対処することを納入メーカーに要求した。ついでながら、PCのメインテナンスは予備機を用意しsend-back方式である。

これらの計算機は、いずれも100BaseTXでLayer

2 Switchに図1のように接続されている。(ディスクサーバー2台は1G BaseFXである。)(研究用Alphaクラスターを含め)、現システムは100BaseTXでの接続のため本格的な並列計算用のクラスターとは言えないが、コストを考えると最善であると思う。

3. 24時間稼働のためのセキュリティ対策

さて、PC clusterとして使用するには何より24時間稼働する環境づくりが欠かせない。学生によるリブート、シャットダウン、システムの変更等が可能であってはならない。そのため、1) 誤って押したり、画面がフリーズした際に押してもシャットダウンしないよう、リセットボタン、電源ボタンを無効にした。2) linuxでは画面がフリーズした際にリブートするためのCTRL-ALT-DELが用意されているが、inittabで無効にする必要がある。3) BIOSの変更ができないようパスワードでロック、4) ブート時にシングルユーザーモードなどでブートを試みることができないようブートルoaderを設定する必要がある。このシステムではliloではなく汎用ブートルoaderであるGRUB¹⁾を用いている。

もちろん、電源ケーブルを抜けばシャットダウンさせることは可能であるが、そこまで防止することはコストを考えれば特策ではなかろう。では盗難防止の面ではどうであろう。BIOSはロックしてあるが筐体を開ければ、BIOSの初期化も可能である。またメモリーの盗難も考えられる。そのため、筐体のパネルは特殊ネジを使用し普通のドライバーでは開けることができないように工夫した。私の案ではなかったのだが、特殊ネジ自体は非常に安価であるので盗難防止には名案であろうと思う。

また、Floppy diskとCD-ROMは、悪用されないようなシステム設定をすることは簡単だが、全ての端末に用意するだけの必要性はないため、購入しないことにした。CD-ROMとともかく、Floppy diskはディスクトラブルの際のブート用としてあれば大変助かるのだが、予算的にはともかく、使用を試みる学生により壊れることが予想されるので、これも無しで済ました。外付のブート用機器を接続するSCSI等はないため、ディスクトラブルの際は筐体を開けて作業する意外には手はない。ディスク交換の事態にならないよう、必ずブート可能なカーネルを用意するようカーネルのアップグレードの際は注意が肝心である

表 1 ハードウェア構成

	PC x 120	PC server x 6	Alpha PC x 18
cpu	Celeron 500MHz	Pentium II 750 MHz	Alpha 21264A 750MHz x 2
mainboard	A Open AX6BC Type R (Intel 440BX)	TYAN Tiger 100	DP264
memory	ECC 128 MB	ECC 1 GB	ECC 1 GB x 16/2GB x 2
system disk	Seagate (ST36421A) ATA 6 GB	Ultra 160 9 GB	Ultra 2 Wide 9GB
network	3Com 3C905B (10/100Base TX)	3Com 3C905B	3Com 3C905B
video card	Matrox G400	Matrox G200	3Dlabs
sound card	約 20 台程に CREATIVE Vibra 128	-	-

表 2 デスクトップのセキュリティ対策

ハードウェア		ソフトウェア	
CD-ROM	無し	BIOS	パスワードによりロック
Floppy disk	無し		キーボード無しでもブート可能に設定
筐体	特殊ネジにより固定	Boot loader	GRUB
リセットボタン	無効に設定		パスワードにより Multi-user mode 以外ではブート不可能にロック
電源ボタン	無効に設定	CTRL-ALT-DEL	inittab で無効に設定

4. システム設定

PC へのシステムインストールは、一台の PC をシステム設定した後、そのディスクのデッドコピーを納入してもらった。NIS server, DNS, sendmail, ntp 設定はもちろん、automount の設定、tcpwrapper, pam の設定等のシステム管理情報は予め設定しておく。各種サーバーは役割毎に別名 (ns, ntp, pop, smtp, proxy, www, news, ftp...) を設定し、DNS において別名と本名とのマッピング (CNAME) 変更によりサーバーの変更が容易なよう計った。とは言っても、IP address とホストネームだけは各計算機毎に変更せねばならない。single user mode で立ち上げた後、あらかじめ作成しておいた shell script を実行し変更した。面倒なのはプリンター設定で、教室毎でデフォルトのプリンターは異なる。また各教室にも前中後 3 台のプリンターが設置してあるので、princap ファイルも全く同じと言う訳にはいかない。立ち上げた後ファイルを転送し個々に変更した。立ち上げ後システムの管理用ファイルの転送をどのように執り行うか予め定めておき、その為に必要な設定 (例えば、ssh の authorized_keys 等の設定) を忘れないことである。

また、一般に開放している計算機の場合、不必要に login したまま放置するユーザーも多い。また interactive に nice 値も変更せず長時間にわたりプログラムを実行するユーザーもいる。一定の時間入力データの無いリモート接続 / デスクトップは、強制終了するプログラム (autolog) を使用している。更に重要なことの一つは、暴走したプログラムをどのように Kill するかである。netscape はその代表だが、CPU だけを消費して

いる状態に陥った emacs もよく見掛ける。これは運用時の PC 管理の一つであるが、この手の house-keeping 管理は、個々の PC でせず管理サーバーの一つにおいて、cron で定時に shell script を起動し、ssh を用いリモートジョブ実行により house-keeping している。netscape は、デスクトップの使用者の終了時 (X sever の終了時) に、killall コマンドにより停止する方法をとっている。また、(デスクトップを使用できない) 深夜に xdm/gdm を毎日再起動することにより暴走プログラムを kill することに努めている。

5. ソフトウェア構成

システムは、パッケージ管理が気に入る、Debian GNU/Linux¹⁾ を使用している。第一義的には学生が使用するデスクトップなので、ほとんどのソフトウェアをインストールした。

デスクトップはGNOMEを使用し、Window manager は Enlightenment である。GNOME 及び Enlightenment に関係する種々のデフォルトは、もちろん予め設定しユーザー登録時に ホームディレクトリーの下にコピーするユーザー登録スクリプトを作成している。Gnome 設定では、各種ゲームプログラム、スクリーンセーバーは使用できないよう除去した。ゲームの利用はあながち無意味とは言いつれないが、研究用の PC クラスタでもあるので、CPU を無駄に使用されたくないからである。

Debian には、研究者には必須な LAPACK や FFT 等の数学ライブラリーも各種用意されている。また、PC クラスタ上で並列計算するためのライブラリーも利用できる。我々のところでは、PVM, MPI の両方とも

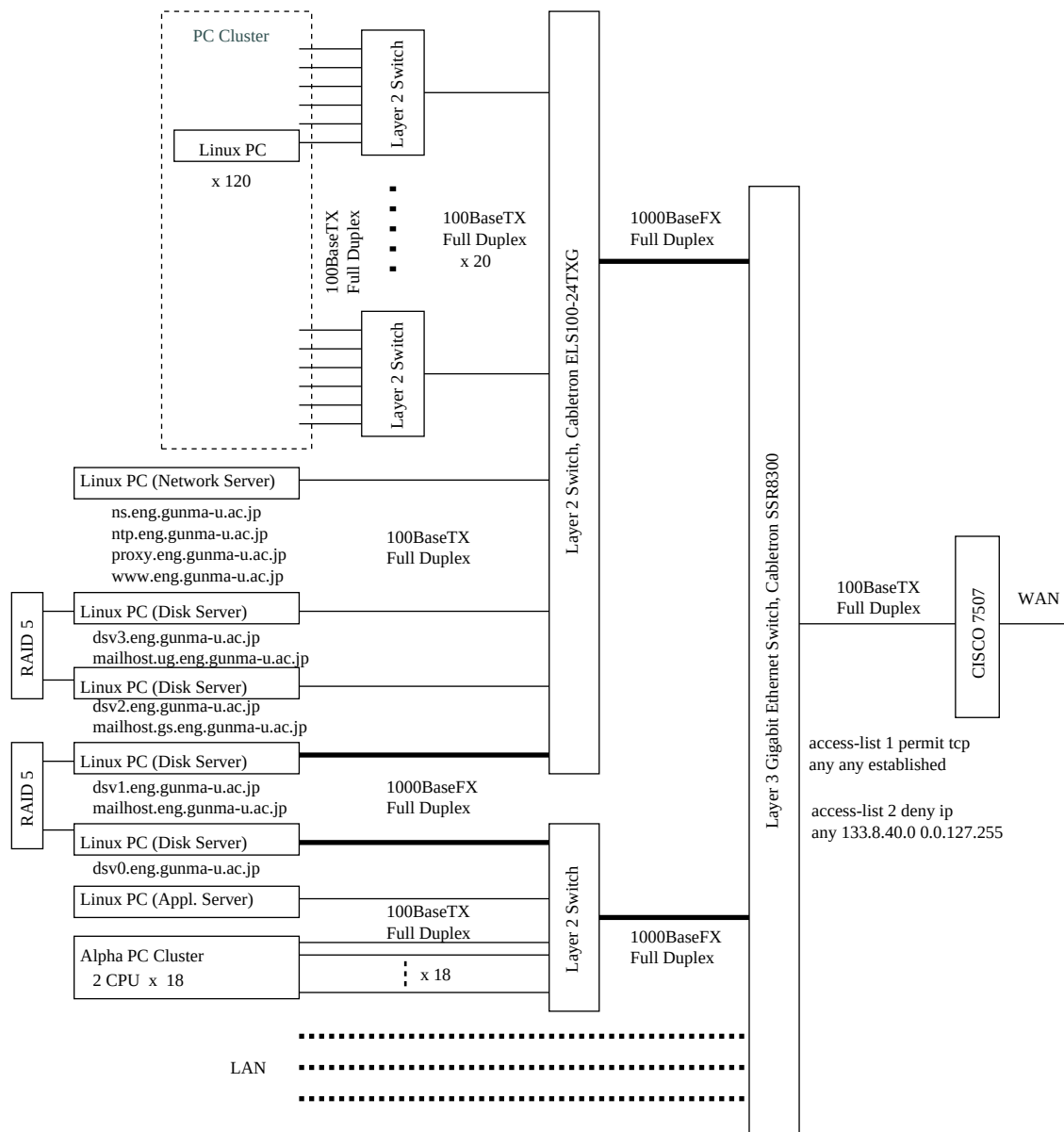


図 1 PC クラスター / サーバーからなるネットワーク構成図

インストールしてある。LAPACK の PVM, MPI 版も Debian からである。クラスター上での並列計算は、この PC クラスターではいささか CPU が見劣りする。本格的な並列計算には、(ネットワーク接続は 100BaseTX ではあるが)、Dual alpha 21264A 750MHz の 18 台からなるクラスターを用意してある。この PC クラスターの最も容易な且つ有用な利用方法はバッチ処理である。

バッチ処理プログラムは各種あるが、フリーソフトとしては、DQS, Queue がある。私は、使用方法が簡

単なため Queue²⁾ が気に入っている。各計算機の load average に基づき負荷の小さい計算機上でジョブを実行してくれる。script でジョブを投入する際に注意しないとイケないのだが、load average に基づくジョブ実行なので、ジョブを投入後 load average に反映されるまで時間を置かないと一台の計算機に多数のジョブが投入されることになるのが欠点である。Queue は、処理能力等を考慮した計算機間でのジョブ投入の優先順位、同時実行するジョブ数、メモリー使用可能量、CPU 時間の上限等を設定できるので、種々の異なる計算機からな

表3 ソフトウェア構成

Linux	debian potato
Desktop	gnome/enlightenment
Browser	netscape
Graphics, DTP	gimp, tgif, tetex + jtex, gs, gv, acroread
Editors	emacs/xemacs, code-crusader, code-medic
Script languages	awk, perl, python, tcl/tk, scheme
Mathematics	R, octave, scilab
Mathematical libraries	BLAS/ATLAS, LAPACK, FFT
Libraries for parallel comp.	PVM, (BLACS, SCALAPACK) MPICH MPI (BLACS, SCALAPACK) LAM MPI (BLACS, SCALAPACK)
Queueing for cluster	queue, DQS
Temporary file space for better I/O	2 GB in local ATA-IDE disk
Secure ...	telnet-ssl, open ssh

PVM: Parallel Virtual Machine
MPI: Message Passing Interface
Queue: Load balancing/distributed batch processing and local rsh replacement system
DQS: Distributed Queueing System

るクラスターでも使用できよう。一方、使用者が学ぶ必要があるのは、1つのコマンド、数個のオプションの利用法だけである。

Queueを用いて、サーバーよりジョブを投入した例を表3に示す。

表4 Queueの使用例

```
ug% queue -q -d days -n -w -- SMB12L.sh \
< /dev/null >& error.log &
ug% ps fxa | grep queue
473 ? S 0:53 /usr/sbin/queued
26012 ? S 0:00 queue -q -d days -n -w -h ug -- SMB25L.sh
26169 ? S 0:00 queue -q -d days -n -w -- SMB12L.sh
26191 ? S 0:00 queue -q -d days -n -w -- SMB10L.sh
26203 ? S 0:00 queue -q -d days -n -w -- SMB9L.sh
26206 ? S 0:00 queue -q -d days -n -w -- SMB8L.sh
26208 ? S 0:00 queue -q -d days -n -w -- SMB7L.sh
...
913 ? S 0:00 queue -q -d days -n -w -- sol_4_L60 3.514
968 ? S 0:00 queue -q -d days -n -w -- sol_4_L60 3.568
1006 ? S 0:00 queue -q -d days -n -w -- sol_4_L60 3.570
ug% kill -9 913
```

このPCクラスターでは、クラスターとしての使用を促進するため、各PCへは外部からloginできないよう制限し、通常のバックグラウンドでのジョブの実行はデスクトップ利用者以外には不可能なように管理している。では、投入したジョブをkillしなければいけない時はどう対処するのであろうか？もし、killする必要があるときは、ジョブを投入したサーバーで単にそのジョブに対応するqueueをkillすればよい。

6. ネットワークセキュリティー

近年ネットワークセキュリティーの重要性が増す中、rsh/rloginを使用せずssh/telnet-sslを用いている。また、学生のパスワード等は秘密保持不可能であるという前提で、PCから学内へのアクセスは、学外の計算機と同じ扱いをしている。つまり、学外からアクセスできないように制限している計算機には、PCからもアクセスできない。一方、PCから学外へはアクセスできるが、学外からはアクセスできないようにルーターで設定している。サーバーへの学外からのログインも学部学生は特に理由がある場合を除き禁止、大学院学生の場合は、国内の大学、政府研究機関のみ許可、教官の場合は国内外の大学、研究機関のみ可能なよう、tcpwrapperおよびPAMで設定してある。それ以外の組織から接続する必要がある場合は申請してもらうことになっている。

7. まとめ

情報処理演習用Linuxデスクトップ120台をクラスター構成により研究システムとして共用するシステムを紹介した。たとえPentium III 1 GHzの半分以下のCPU能力であるCeleron 500MHzでも、クラスター全体のジョブ処理能力は $120/3 = 40$ 倍である。パラメーターを変えて多数回実行するジョブでは特に有用である。

参考文献

- 1) <http://www.debian.org/>
- 2) <http://www.gnu.org/software/queue/queue.html>